

## g コンテンツ論文集によせて

今回、g コンテンツ流通推進協議会は非常に適切な時期にスタートしたと思います。

その理由はいくつかあります。第一は G - XML との関係でグローバルスタンダードという問題がだんだん明確化されていき、その中で日本の業界ならびに政府がきちんとした働きかけをする段階になってきたということです。

第二は GPS が携帯に付くことになりましたが、これは初めて個人レベルの日常生活のレベルで GPS が付帯するという、未曾有の経験が草の根レベルで始まったことだと思います。そしてこれは日本人の空間的なビヘイビア（態度）、行動を変えるきっかけになると思います。

第三はこれと密接に関連するのですが、二次元のバーコードが地図に付けられるようになったということです。今のところこれは IC チップが使われていくのか二次元バーコードになるのかということですが、二次元バーコードがそのまま延びていくのではないかと思います。特に重要なのは、FOMA に代表されるような撮影機能を持った携帯電話の情報をバーコードで光学的に写すことができ、そのままインターネットにつなげてダイレクトに情報が伝わるという状況がほぼ完成してしまったということです。今年の 2 月の始めにこの機能を持った携帯電話が発売されていますが、携帯電話というごく一般的な情報端末の中に入ってしまったということが画期的であり、しかも GPS も付いているとすると非常に普及するのではないのでしょうか。

第四番目としては、慶應大学と NHK が共同して、番組を製作しておりますが地図情報に対する見直しがグローバルにもローカルにも起こってくるだろうと思います。NHK というマスメディアを通じてもう一回地図情報の見直しが入ってくると、その中でいろいろなものが発見されてくると思いますが、これらの情報は実はすべて膨大な g コンテンツであり、そういったコンテンツ情報を必要とするという状況が来るであろうと思われます。

例えば二次元バーコードがタクシーやトラック、バスなどの車体に拡大されて印刷され、それを読み取るとサイバースペースのアドレスにたどり着くというように、あらゆる移動体はすべてメディアになり得ます。しかも自動車などは GPS を持っておりますし、二次元バーコードの普及というのは我々の考えられないような普及の仕方をする可能性があります。

我々は予約をしてコンサートや相撲に行きますが、演奏や取り組みが始まるまで 30 分は黙って待ってはいけません。その間にこのような仕組みが使えたら大変な情報が入ってくると思います。もしかすると駅の待合室がすっかり変わってしまうかもしれません。今、駅の待合室はそういった情報を得るためには何も無いような状態ですが、そこにポスターなどがあって、そのポスターに端末を当てるとあらゆる情報が手に入るような

るといようなことがあれば、すごく面白いのではないかと思います。今、我々は人気レストランなどでは30分くらい行列で待ちながらお喋りをしているような状態がありますが、その間にその土地周辺の情報が手に入るようになるとかかなり過ごし方が違ってくると思います。そのようなことが実現すれば、地域情報あるいは地域広告がこれからガラッと変わってしまうということが考えられますが、そうするとコンテンツ情報が徹底的に不足するという時代が来るのではと思います。

従来はホームページというのはPCをベースにしたものですが、今度ドコモとIBMが組んでホームページビルダーというソフトを作りました。これは個人が携帯電話を使って自分のホームページができるというのですが、そのような時代になったということはすごいことだと思います。

以上のような事柄を考えると今年はgコンテンツが大きく普及していく年なのではないでしょうか。従来のgコンテンツがあまりにも限定的だったかもしれませんが、今後はエンターテイメント、娯楽から教育、地域情報、様々なものが全部入るようなgコンテンツの作成と更新を扱うような産業がものすごく出てくるのではないかと思います。

それと同時にPCで書いていると30~40行くらいの情報を、携帯では10文字10行で圧縮しなければいけないので、非常に短い時間やスペースで自分をアピールするような技術も必要になってくると思われませんが、おそらく携帯というメディアを通じて地域情報はまず普及すると見てよいのではないのでしょうか。さらに加えて言うならば日本は本格的な偵察衛星の時代に入ってきておりますので、サテライトも入ってくると思います。

そう考えますとgコンテンツは非常に重要になると同時に、GISというものを単独でやっている時代から、GIS&GPS、GIS&携帯、GIS&サテライト、GIS&ナビゲーション、というように&という形でテーマを結び、GISを中心としていろいろな境界、ないしは業態が機能的に融合する時代がやってくるだろうと感じられます。そういった意味でも今年は画期的だったのではないのでしょうか。おそらく今回の論文集にはそのようなキーになる考え方の全てが詰めこまれておりますので、非常に読みごたえのあるものが出来上がるのではないかと、私自身も期待しております。

2004年2月9日